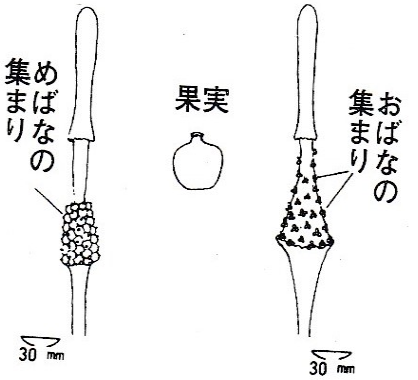
今日の観察ポイント

コウライテンナンショウ（マムシグサ）

ちょっと不気味な茎の模様からマムシグサといった方が通りがいいのかもしれませんが、このテンナンショウの仲間は分類学者泣かせで、とりあえずは北海道でよくみられる種はコウライテンナンショウ？という説があります。特異な形態なのでこの仲間であることはすぐわかりますが、花の色や葉の形が非常に差が大きく、地域差もあり、それぞれで別種として報告され、日本でも 30 種くらいの種になっていますが、遺伝子的にほとんど差がなく、1 種類として考えてもよいのではという分類学者もいるそうです。まだ分類は流動的ですが、このなかまをまとめて「広義の」マムシグサという言い方が現時点ではよくされているようです。一方で「狭義の」マムシグサはこのコウライテンナンショウの別名であったり、あるいは別のテンナンショウ属の種であったり、混乱がみられます。

【コウライテンナンショウ】（マムシグサ）　サトイモ科　テンナンショウ属

薄暗い森の中に 30～80cmほどまっすぐたちあがった、まさに蛇のような文様の茎が特徴ですが、実はこれは茎ではなく葉柄が筒状になったもの（葉鞘）で偽茎といわれます。ここから 2 本の葉をだし、7～15 枚の小葉にわかれる鳥足状の複葉の形をとります。葉の枚数、葉の形には別種かと思うほどの変異があります。茎の先に奇妙な花をつけますが、同じサトイモ科のミズバショウと同じ形態で、花弁のように見えるのは仏炎苞といわれる葉になります。色は緑から紫っぽいのまでありますが、白い縦じまのストライプが結構おしゃれです。



このラッパ状になった苞の中に棒のような肉穂花序がありますが、苞の入り口から少し出て見えるのは付属体といわれ、本当の花序は根元のほうにあります。雄株と雌株は別で、雌花の花のほうが太くて大きいです。今日は苞の中を覗き込んで観察してみましょう。 このテンナンショウの仲間は性転換をする不思議な性質をもちます。発芽して数年は葉だけで、ある程度成長すると

雄株になり雄花をつけ、さらに数年して栄養充分になると雌株になって雌花をつけます。

　さらに、受粉の仕方もユニークです。キノコバエやアリによる虫媒花ですが、雄花に引きつけられたた虫はラッパ状の花の中に落下し、底で花粉まみれになります。ツルツルした苞の中で這いあがれずもがくうちに雄花の苞の底には隙間というか穴があいており、そこから無事脱出できます。これがこんどは雌花にいって、またもや苞のラッパに落ち込みます。ところが雌花の底には穴はなく、受粉をさせた虫はそのまま花の中で死んでしまうそうです。何だか食虫植物のようですが、ウツボカズラのように虫を栄養とするわけでないようです。それにしても受粉させてくれた虫の恩を仇でかえす、なかなかの性格の植物ですね。苞の底に隙間（穴）があるかどうかでも雄か雌株かがわかるということになります。今日観察した個体はどちらでしょうか？このほうが外から観察できるので区別が容易かもしれません。

　秋には赤いツブツブがトウモロコシのように並んだ実をつけます。おいしそうな色をしていますが、有毒でシュウサンカルシウムやサポニンといった毒をもち、ちょっとかじってみるだけでも口の中がひどく痛くなるそうで、私も試してみる勇気はありません。

　根はサトイモ同様にデンプンを含むイモを形成しますがこれにも毒があります。しかしアイヌの人たち食べるものが無い冬は、蒸し焼きなどにして食用にしていたそうです。一方で毒のあるのもわかっていて、トリカブト同様毒矢にもつかったとか。毒は薬でもあり、干した根は天南星といわれる漢方薬の材料です。　やっぱりなんか不気味でおっかない植物ですね・・

【ヒロハテンナンショウ】　　サトイモ科　テンナンショウ属

　北海道では日本海側に分布。コウライテンナンショウとの違いとされるのは葉が茎から１本で、小葉も5枚程度で、開き方も手のひらのようであること、花が草のてっぺんでなく、葉より下につくことです。

【ウラシマソウ】　　サトイモ科　テンナンショウ属

　北海道では道南でみられるそうです。花序の付属体が 50～70cmもムチのように伸びる一度見たら忘れられない形です。名前も浦島太郎の釣竿からきています残念ながら、私はみたことがありません。

（写真・文：　磯）　　ヒロハテンナンショウ、ウラシマソウの写真はネットから借用

花の模式図は北海道の野の花（谷口ら編　北海道新聞社）　90Pより